

# モルヒネ持続皮下注射からオキシコドン徐放錠へのオピオイドローテーション後せん妄が発現した一症例

松山和代<sup>1)2)</sup> 上野裕之<sup>1)</sup> 齋藤 誠<sup>1)</sup> 井上敦介<sup>1)</sup> 庄野裕志<sup>1)</sup> 里見絵理子<sup>2)</sup>  
小川朝生<sup>3)</sup> 山内一恭<sup>1)</sup> 本田芳久<sup>1)</sup> 桑原 健<sup>4)</sup> 小森勝也<sup>1)</sup>

IRYO Vol. 63 No. 4 (254-259) 2009

## 要 旨

膀胱がんの多発肺転移と胸水貯留による呼吸困難感の軽減を目的に、塩酸モルヒネ注5 mg/day 投与を実施し、症状が緩和された患者が在宅医療の導入を目指し、オキシコドン徐放錠へオピオイドローテーション後、せん妄が発現した症例を経験した。再度、塩酸モルヒネ注へ変更することでせん妄は消失したことから、オキシコドンによるものである可能性が高いと考えられた。オキシコドンはモルヒネと比較して嘔気、幻覚、かゆみなどの副作用が少なく、がん性疼痛治療の一般臨床において繁用されている。また、モルヒネからオキシコドンへのローテーションにより、せん妄が改善したという報告はあるものの、モルヒネからオキシコドンへのローテーションによるせん妄の発現についてはこれまで報告がない。終末期においては多臓器不全、電解質異常、貧血、低酸素症、感染症、脳腫瘍、脳転移、薬剤など複数のせん妄要因があるため、せん妄発現のリスクが少ないとされるオキシコドンを使用する場合でも、患者を注意深く観察し、早期発見に努めることが必要であると考えられる。

キーワード オキシコドン, せん妄, オピオイドローテーション

## 緒 言

WHO 方式がん性疼痛治療法において基本となるオピオイドはモルヒネであり、痛みだけでなく、がん患者の肺転移や胸水貯留による呼吸困難感に対する全身投与も有効とされている<sup>1)2)</sup>。

2003年に本邦で販売されたオキシコドン徐放錠はモルヒネの代替薬として中等度-高度のがん性疼痛に対して有効でありモルヒネに比べ嘔気、幻覚、か

ゆみなどの副作用が少ないこと<sup>3)4)</sup>から一般臨床において繁用されている。また、近年オキシコドンががん患者の呼吸困難感に有効であることが報告されている<sup>5)6)</sup>。

今回、呼吸困難感に対し少量のモルヒネ持続皮下注射を施行中に、在宅医療への移行を目指し、オキシコドン徐放錠へオピオイドローテーションを実施した際に、せん妄を発現した症例を経験したので報告する。

国立病院機構大阪医療センター 1) 薬剤科 2) がんサポートチーム 3) 国立がんセンター東病院 臨床開発センター 精神腫瘍学開発部 4) 国立病院機構南京都病院 薬剤科  
別刷請求先：松山和代 国立病院機構大阪医療センター 薬剤科 〒540-0006 大阪府大阪市中央区法円坂2-1-14  
(平成20年10月2日受付, 平成21年1月16日受理)

A Case of Delirium Induced by Opioid Rotation from Subcutaneous Continuous Morphine to Sustained-release Oral Oxycodone

Kazuyo Matsuyama<sup>1)2)</sup>, Hiroyuki Ueno<sup>1)</sup>, Makoto Saito<sup>1)</sup>, Atsuyuki Inoue<sup>1)</sup>, Hiroshi Shono<sup>1)</sup>, Eriko Satomi<sup>2)</sup>, Asao Ogawa<sup>3)</sup>, Kazutaka Yamauchi<sup>1)</sup>, Yoshihisa Honda<sup>3)</sup>, Takeshi Kuwahara<sup>4)</sup>, and Katsuya Komori<sup>1)</sup>, 1) 2) NHO Osaka National Hospital, 3) National Cancer Center Hospital East, 4) NHO Minami-Kyoto Hospital

Key Words: oxycodone, delirium, opioid rotation